

農業經濟研究 別冊

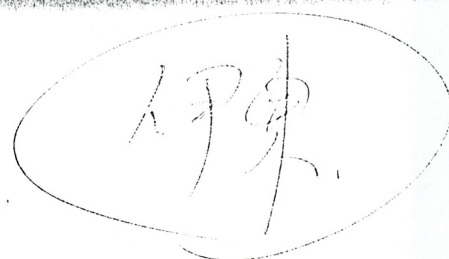
2000年度

日本農業經濟学会論文集

*PROCEEDINGS OF ANNUAL CONFERENCE OF  
THE AGRICULTURAL ECONOMICS SOCIETY OF JAPAN*

*2000*

日本農業經濟学会



# SBS 米輸入におけるマーク・アップの変動に関する研究

伊東正一・蔡家声

(鳥取大学農学部)

The Mark-up in SBS Rice Imports to Japan  
(Shoichi Ito and Jia Sheng Cai)

## 1. はじめに

WTO (世界貿易機関) 協定による日本のコメ輸入は 1995 年からミニマムアクセス (MA) の範疇で始まった。MA 米は一般的な政府輸入 (一般 MA 米) と SBS (Simultaneous buy-and-sell tender system=売買同時入札) の 2 方式で輸入されている [11]。SBS 米の入札においては買い手は政府に対して最大で 1kg 当たり 292 円のマーク・アップ(MU)を支払う。そうして政府はこの MU の高い順に落札することになる。よって、輸入業者はこの MU に対し特別の神経を払うことになる。

しかし、これまでその点に的を絞って分析した報告は少ない。村田 [11] は国際価格と MU との関係性を強調した。また、北出 [8] も「市場メカニズム」を反映しているとしている。しかし、いずれも統計的分析には至っていない。そこで、本稿ではこの MU はどのような形で変化するのか、また、何が影響するのか、その関係を計量的に計測することを試みた。

## 2. マーク・アップ(MU)のメカニズムとモデル

この MU は 1kg 当たり上限が 292 円と決まっている。これは現在の為替相場からみて 1 トン当たり約 3 千ドルとなり、コメの国際相場 (一般のキャルローズで 1 トン当たり 4-500 ドル) に対しおむね 600%の関税に相当する。それだけに輸入業者は MU をできるだけ小さくして入札しようとするわけだが、落札において政府はこの MU が高いものから順に落札していくわけで、MU をいくらにして入札するかは輸入業者が最も神経を使うところである。

これまでの MU は 1995 年の第 1 回 SBS で上限の 292 円となったほかは、いずれもそれ以下で変動している。それを示したのが図 1 であるが、これを見ると MU は第 2 回からアメリカ、中国、オーストラリアがそれぞれ異なる値で落札されているが、近年ではいずれの国もほぼ同じ値で動いている。

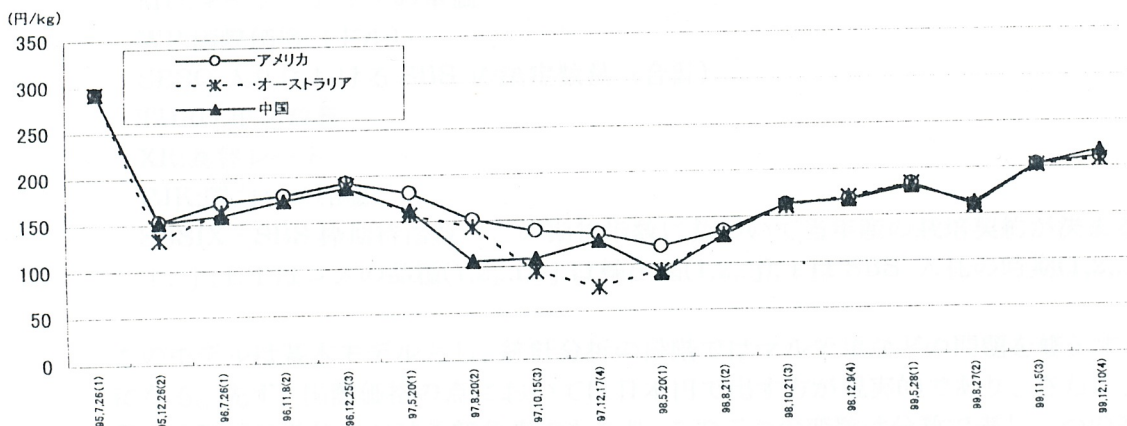


図 1. 米・中・豪SBS米におけるマークアップの推移

資料:食糧庁

それでは何がMUの変化を左右させるのか？SBS 米は日本で販売する際に業者に対しメリットがなければ意味がない。その経済的メリットに影響を及ぼす項目には次のものが含まれると推察される。直接には国内相場、海外における生産現場の国際相場、為替レート、船賃などが考えられる。一方で間接的な影響として、SBS のワク、現地における日本の業者と生産者との契約数量、が考えられる。こうしたSBSのMUを取り巻く総合的な環境を図2に表した。

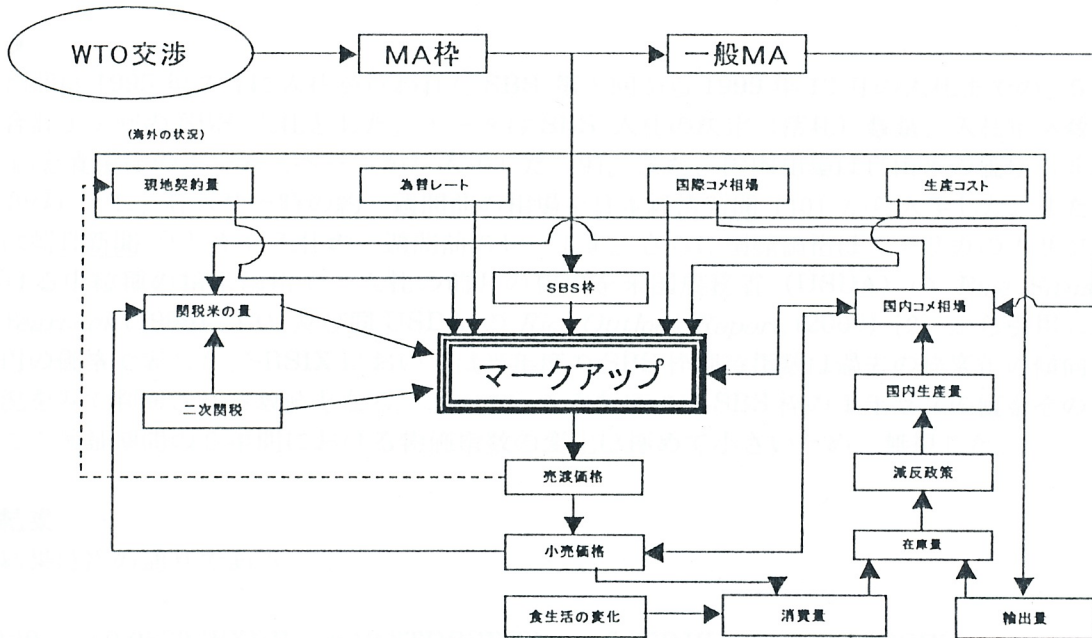


図2. 日本のコメ輸入とマーク・アップをとりまく環境

輸入業者はこのような諸々の要素を考慮した上でMUを決め、入札に挑む。こうした状況を含むモデルの構成はきわめて複雑ではあるが、要所を取り上げてみると次のようなものが考えられる。

$$MU_{ijt} = f(WP_{ijt}, SBSQ_t, TDRQ_{ijt}, XR_{ijt}, PJK_{ijt}, SBSIX_t) \dots\dots\dots (1)$$

MU:マーク・アップの単価

WP:国際価格 (ドル)

SBSQ:入札におけるSBSの決定数量 (合計)

TDRQ:申込数量

XR:為替レート

PJK:国内コメ相場

SBSIX : SBS 枠期待指数 (この期待指数に基づいて当年産の栽培契約が決まる)

i, j, t: i はコメの品種(1,2,..i), j は輸出国(1,2,..j), t は SBS 入札の時期(1,2,..t)をそれぞれ示す。

このモデルは基本モデルとし、統計分析の段階ではマルチ項などの問題を修正するため、改良が必要になる。まず、国際価格の点においては日本円で出す方が現実的であり、さらに、申込数量と決定数量との関係は落札における競争率でもあり、この二つの変数は分数で表し一つの変数とする方がベターであると考えられる。また、今回の分析ではコメの品種はSBS米の中で主な輸入米である短粒種及び中粒種の合計とした。MUのデータはSBSでは主流を占める主要三カ国(アメリカ、中国、オーストラリア)の短・中粒種米の加重平均とした。よって、最終的なモデルは次のように整理される。

$$MU_t = f(WXRP_t, TDRSBSR_t, PJK_t, SBSIX_t) \dots\dots\dots (2)$$

変数の内容は下記のもの以外は式 (1) と同じ、

WXRP:国際価格 (円)、(=WP\*XR)

TDRSBSR:入札の競争率、SBS 決定数量に対する入札申込数量(=Σ<sub>j</sub>TDRQ<sub>jt</sub>/SBSQ<sub>t</sub>)

このモデルを新たな基本とし回帰分析することとした。

### 3. データ

検証の期間は 1995 年 7 月に入札が行われた SBS 第 1 回から 1999 年 12 月の入札までの、5 年間にわたる合計 17 回の SBS 入札とした。データは SBS 入札の決定 (落札) 数量、入札申込数量、MU の単価を食糧庁のホーム・ページから入手した [9]。また、国内相場は自由米の価格 (北海道産きらら 397) とし、各入札当時の約一週間前の相場を日本経済新聞 [10] から入手した。また、為替レートは朝日新聞 [5] から入札の一週間前のレートを。さらに国際価格はアメリカのカリフォルニアにおける中粒種の精米価格で、入札の前月の相場を米国農務省 (USDA) の *Rice Situation Outlook Yearbook* (1999) [3] 及び同 USDA の *Rice Outlook Report*, (2000) [2] から引用し、これを日本円の価格で表した。SBSIX においては当年度の SBS 杵期待指数は過去の杵変化の傾向及び近年の状況をみて判断される数値となる。よって、この数値には SBS 杵の 1 年ラグの値をそのまま使った。この検証期間の 5 年間における物価指数の変化は極めて小さいため、無視した。

### 4. 分析結果

計測の結果は次の通りである。

$$MU_t = 120 - 0.0520 WXRP_t + 12.8 TDRSBSR_t + 6.86 PJK_t + 0.551 SBSIX_t \dots\dots\dots (3)$$

(81.2) (0.0216)·· (4.73)·· (5.53) (0.177)··

R<sup>2</sup>=0.817, 補正 R<sup>2</sup>=0.755, D.W.=2.02, N=17

( ) 内は係数の標準偏差値を示し、··, ·, · はそれぞれ 1 %, 5 %, 及び 10 % のレベルで有意であることを示す

計測された係数は国際相場に対してマイナス、入札競争率に対しプラス、国内相場に対してもプラス、さらには SBS 杵期待指数に対してプラスという予想と一致した符号となった。この結果に基づいて WXRP, TDRSBSR, 及び PJK の弾力性を計測すると、それぞれ -0.733, 0.237 及び 0.629 となった。これは、国際価格、入札申込数量の競争率、及び国内価格が 10% 上昇すると MU は約 -7%, 2% 及び 6% それぞれ変化することを示唆している。

### 5. 考察

分析の結果からみると、まず、国際価格 (WXRP) の影響はネガティブに MU に影響することが示唆された。これは国際価格が上昇することにより、MU は小さくならなければ国内で販売することが困難な状況となることを意味する。また、海外での需要が大きくなったことにより、日本への輸出の必要性は相対的に少なくなるわけで、MU への圧力も小さくなることを意味している。次に、日本の国内価格 (PJK) はポジティブに影響すると考えられ、計測の結果も優位性は 20% 台で低いものの、それを支持している。ただ、国内価格のデータには輸入米に匹敵するものとして「きらら 397」の市場価格を引用したが、海外産のコメもかなり品質を向上していることから「きらら 397」では十分にその影響を表すことには無理があるとも考えられる。

次に、入札の競争力 (RSBSR) はポジティブに影響し、当然ながら入札の申し込み量が多ければ多いほど MU は吊り上げられることを示している。さらに、SBS 杵期待指数 (SBSIX) は現地での契約との関係があり、特にアメリカやオーストラリアでは作付け期の契約数量に影響し、その契約

数量が多ければ多いほど MU を押し上げる結果となる。中国ではこのような作付け期の契約は少ないとされ、こうした契約がなければ入札時期の状況に応じてかなり自由に申込数量を決定できるメリットがある。

今回の分析では観測数が 17 と、限られたものではあるが、MU の変化に影響を与える主要な要因を取り入れて計量分析することができた。コメの SBS 輸入は 5 年間を経過したとはいえ、政府の枠の決定や業者の行動にはまだ不確定要素かつ未熟なところがある。このような点が改善されることにより、MU の相場はより安定したものになってこよう。また、分析においては今後は国内価格データの吟味、現地での生産コストのデータ、さらには「関税化」の要素なども取り入れて分析する必要があるであろう。

## 6. おわりに

SBS の MU は図 2 でも示したように国際、国内的に種々の要因が複雑に影響している。日本のコメ輸入は 1999 年 4 月から関税化(Tariffication)への移行となり、MA 米に関税米が加わる形となった [4, 6]。SBS 米の MU は関税化の中の 2 次関税と似た役割を持っている。この 2 次関税は 2000 年度は 2.5% (10kg 当たり約 100 円) の減少となる。将来も 2 次関税が一定して減少していくことになれば、SBS の MU はそれに伴って減少することになるであろう [7]。海外の生産地ではアメリカを初め生産性を高める努力が展開されている [1]。国内の生産もそれに対応した体制が求められよう。

## 引用文献

- [1] Ito, Shoichi, E. Wesley F. Peterson, Bharat Mainali and Mark W. Rosegrant, "Estimates for Evolution of U.S. Rice Supply Response Using Implicit Revenue Functions: Implications to the World Food Supply and Trade," *Japanese Journal of Rural Economics*, Vol.1, 1999, pp.39-51.
- [2] United States Department of Agriculture (USDA), *Rice Outlook Report*, RCS-0799, January 25, 2000.
- [3] United States Department of Agriculture (USDA), *Rice Situation and Outlook Yearbook*, RCS-1999, November 1999.
- [4] Wailes, Eric J., Gail L. Cramer, Jim M. Hansen, "Tariffication of Rice Imports in Japan," 伊東正一編著『第 7 回ジャポニカ米・国際学術調査研究報告会及びシンポジウム』資料、1999 年 3 月、於：福岡、pp. 17-23.
- [5] 朝日新聞 (経済欄の為替相場を引用)
- [6] 伊東正一「日本の「関税化」と外国産米輸入の可能性」伊東正一編著『第 7 回ジャポニカ米・国際学術調査研究報告会及びシンポジウム』資料、1999 年 3 月、於：福岡、pp.1-9.
- [7] 伊東正一「「関税化」におけるコメ輸入のメカニズム」農業経済研究別冊 (1999 年度 日本農業経済学会論文集) pp.379-382.
- [8] 北出俊昭「MA 米の一般輸入と SBS の動向」『農業と経済』1999 年 9 月号, pp. 74-81.
- [9] 食糧庁のホームページ : <http://www.syokuryo.maff.go.jp/archives/index.htm#class3>
- [10] 日本経済新聞 (毎週火曜日付けの自由米価格を引用)
- [11] 村田武「WTO 体制と米・食糧」『WTO 体制下のコメと食糧』(食糧政策研究会編) の第 2 章、日本経済評論社、1999 年 6 月、pp. 25-44

謝辞：本論文の作成に当たり、レフェリーの多大なる助言により改善することができた。ここに衷心より謝意を表したい。